

服部昌之先生の御逝去を悼んで

服部昌之先生の御逝去の報を受けたのは、11月22日（日）の早朝であった。電話口で一瞬頭の中が真っ白になったのを覚えている。先生がここ5年程の間に2度ポリープの撤去手術のためご入院されたことは直接先生からもお聞きし、以前に比べて若干スマートになられたお体を目にして、再発されないことを願っていた。6月末に早稲田大学で開催された第7回古代交通研究会大会でも御元気そうな先生にお会いし、近況など御報告申し上げた直後のことだったので、より以上に信じ難い訃報であった。

先生は、昭和7年9月20日、徳島県勝浦郡小松島町（現小松島市）に誕生された。昭和32年3月に京都大学大学院文学研究科修士課程を修了され、同年4月から広島女子短期大学助手として赴任され、同短期大学講師・助教授を経て昭和40年4月に広島女子大学文学部助教授となられた。先生の条里制研究は、この広島時代に米倉二郎先生の元で培われたと聞き及んでいる。その後、昭和42年4月に関西大学文学部助教授として帰阪され、昭和46年4月に大阪市立大学文学部助教授に就任された。当時大阪市立大学文学部の4回生であった私は、この時初めて先生とお会いし講義を受講した。その後大学院に進んだ私は、歴史地理学専攻の学生・院生が私一人であったこともあり、先生から公私にわたってはかりしれないほどの御教示を得た。学会等で京都大学を始めとして数々の大学の先生方や現在第一線で活躍中の当時の院生諸氏を御紹介下さったのも先生である。温厚な性格の先生は、学生・院生に対しても厳正かつ温かく指導され、学内での人望も厚かった。とりわけ、学生・院生の指導はしばしば講義終了後にまでおよび、大学周辺や天王寺界隈でお酒を飲みつつ地理学の話をしたり、時には我々学生・

院生の就職相談に耳を傾けるのが常であった。その後、昭和52年4月には大阪市立大学文学部教授に就任され、平成5年3月の御退職後、同年4月から専修大学文学部教授として赴任され、再度後進の指導に当たられることになった。

先生の歴史地理学者としての第一歩は、昭和28年施行の「町村合併促進法」による地方行政区画の変容を機縁とする修士論文「古代行政区画の地理的意義」およびその中核部分をまとめられた処女論文「郡の成立過程」（『人文地理』10巻1号、昭和33年）であるが、以来先生は条里と地方行政区画を中心とする古代地域の歴史地理学的研究に専心されることになる。昭和38年に発表された論文「歴史的地域の諸問題」（『広島女子短期大学研究紀要』12）では、個別の事象を地域論的立場から再構成するためには、水津一朗先生が提唱された歴史的地域ないし歴史的領域の視角の導入が重要であると指摘された。そして、歴史的地域の考察から条里と都市・交通路・地方行政区画との関連性の展望へと歩を進め、さらにそれらの研究成果をまとめ古代景観図として総合化を目指すことを課題としている。先生の研究計画は、この時点ではほぼ固まったとみてよかろう。その後先生はこうした研究計画に従って着実に御研究を進められた。近江湖北、奈良盆地、淀川右岸、近江湖南および大阪平野などの地域条里の分布研究、阿波・紀伊・播磨・丹波・讃岐・山城・大和・摂津・河内・和泉など古代諸国における条里分布調査をもとにした国郡境界の研究がそれに該当するものであろう。

先生の御研究は以上にとどまらず、御自身の御研究の進展と平行して、条里研究の動向と課題についても絶えず注意を払っていた。それは「条里制研究の課題と方法」（『人文地

理』25巻2号、昭和48年) や「条里制研究の現状と問題点」(『条里制の諸問題Ⅰ』、昭和57年)などの御発表からもわかる。さらに、考古学分野による埋没条里の発掘調査にも目を向けられ、埋没条里と現条里地割との関連性について検討された「埋没条里地割研究ノート」(『人文研究』27-1、昭和50年)は、条里地割の継続性という研究分野での先駆的役割を果たしたと言える。これに関しては、考古学に半ば足を踏み入れていた私が先生に刺激を与え得た唯一の研究分野だと思える。こうした永年にわたる御研究の成果は、『律令国家の歴史地理学的研究』(昭和58年)として公にされ、同書によって京都大学文学博士の学位をうけられた。

先生は平成2年から2年間大阪市立大学評議員を務められ、学会においても、常に大きな役割を果たしてこられた。歴史地理学会で

は、昭和43年から評議員として御尽力され、平成5年からの3年間は常任委員長の重責を全うされ、平成8年からは会長に御就任になられた。また、昭和60年1月からの2期4年間は条里制研究会の初代会長に御就任になられ、条里に関する学際的研究の基礎を築かれた。さらに、日本地理学会・人文地理学会でも永年にわたり役員としてその発展に尽くされた。

先生の御研究はさらに継続される筈であった。先生が日頃からよく口にされていた全国的な条里分布図集成も未刊のままである。志半ばで他界され、さぞかし御無念であつたろうと思われる。先生の御存命中に一目お会いできなかつたことが悔やまれる。しかし、今はただ心から先生の御冥福をお祈りするしかない。

(木原 克司)